

## 米国フロリダ州におけるチチュウカイミバエの発生について

平成9年5月29日、フロリダ州ヒルズボロー郡でチチュウカイミバエが発見された。その後、同州パーク郡、マナティー郡、オレンジ郡及びサラソタ郡でも発生が確認された。

農林水産省は直ちに米国植物検疫当局に対し、(1)検疫規制地域産寄生生果実への植物検疫証明書の発給停止(2)検疫規制地域を経由する検疫規制地域外産寄生生果実の汚染防止措置(3)植物検疫証明書の「原産地」欄への生産郡名の記載等を要請し、検疫規制地域産の生果実の輸入を規制した。また、フロリダ州産生果実の輸入検疫対応としては、検査抽出量を通常より多くして、厳重な検査を実施している。

発生地域での防除対策については、米国でのミ

バエ類が侵入したときの「緊急防除活動計画」(アクションプラン)に従って、撲滅のための組織が設置され、調査、防除、取締り、不妊虫放飼、民間情報の収集及び広報等の各担当が置かれ、実施されている。

その内容は、(1)発生地周辺を「検疫規制地域」として指定し、ミバエ寄生生果実の移動を規制するとともに、果実販売店、種苗生産業者及び青果物の卸売市場等に対する規制内容の説明(2)調査・防除用誘殺トラップを設置しての濃密調査の実施(3)航空機による防除薬剤の散布・住宅地等における地上薬剤散布の実施、幼虫発見地点での土壤消毒の実施及び果実の除去(4)チチュウカイミバエ不妊虫の放飼等の徹底した防除が実施されている。

### 海外のニュース

**ダイズの“Sudden Death Syndrome”の病原菌は*Fusarium solani*の新しい分化型 (f.sp. *glycines*)**

“Sudden Death Syndrome : 突然死症候群”は、生育中期以降のダイズに突然の落葉、莢の奇形などの症状を起こすものとして、1971年頃アメリカ合衆国のアーカンソー州で初めて観察された。病徴は、葉の脈間に退緑斑点あるいは斑紋が生じ、それらが拡大・融合することにより脈間の退緑条斑となる。これらの条斑は葉の主脈あるいは大きな支脈を残して壊死し、葉は最終的には落葉あるいは枯れ上がる。このため、激しく発生したほ場では全体が葉焼け症状を呈する。被害株の花器、莢が奇形化し、子実は小型化する。被害株の茎、地下部は表面に青色の分生孢子塊が認められ、また通導組織は褐変する。特に多収性のほ場での被害が顕著であり、激しい発生ほ場の場合は80~90%の減収となるが、通常は5~15%の減収である。

本症状は、その後1984年にはミシシッピ川流域のテネシー、ミズーリ、ミシシッピ、ケンタッキーの各州、1986年までにイリノイ、インディアナ州で確認され、その後アラバマ、ジョージア、アイオワ、カンザス、オハイオ、ウィスコンシン

州で確認されている。アメリカ合衆国以外では、アルゼンチン、ブラジルのダイズ栽培地域で発生している。

原因については、当初葉焼病 (*Xanthomonas campestris* pv. *glycinea*)、シスト線虫病等が疑われたが、1988年 *Fusarium solani* によることが確認された。しかしながら、この *F. solani* の中には2つのタイプがあり、ダイズに根腐れを起こす *F. solani* f.sp. *phaseoli* とは異なり、葉に特徴的な症状を引き起こすタイプがあることが判明し、当該タイプが Sudden Death Syndrome の病原菌とされ、新しい分化型 (f.sp. *glycines*) が提案された。本菌は種子伝染が確認されていないが、土壤伝染性であるためダイズ栽培上の重要な病害として注目されている。

(Plant Disease 81 : 1100-1111)

発行所	横浜植物防疫所
	〒231 横浜市中区北仲通5-57 横浜第二合同庁舎 ☎(045)211-7155
発行人	小林 敏 郎
編集責任者	今村 毅
印刷所	内村印刷株式会社